青年ヘーゲル学派とマルクス（VI）

——若きエンゲルス——

別　府　芳　雄

は　し　が　き

今回は青年エンゲルスをとりあげる。エンゲルスは，これまで過少評価されてきた哲学者である。たとえば，a）ある人はエンゲルスをマルクスに対する単なる経済的援助者ぐらいに考えたり，または，b）マルクスとエンゲルスを混然一体のものと考えたり，さらには，c）科学的社会主義の成立にかんして，いつも「マルクスは第1ヴァイオリンを弾き，エンゲルスは第2ヴァイオリンを弾いた」という具合の誤解であって，これらはいずれもエンゲルスに対する無理解にもとづく過少評価のように思われる。いったい，これだけユニークな個性の強烈な2人の独創的思想家を混然一体と考える方が余程おかしな話であって，少しくマルクスの伝記でも読んだひとなら，初期の頃のマルクスをいつもリードしていたのは，エンゲルスだったという印象をうけるはずである。若い頃のエンゲルスは，けっして〈第2ヴァイオリン〉ではなかった。エンゲルスはマルクスより2才年下ではあったが，マルクスより先に，すでに1839年頃から数多い論文を発表している，すぐれた思想家で「彼らが友情を結んだはじめには，決定的な領域では，エンゲルスの方が受けるよりもあたえた」（メーリング，。・印引用者）ことは確かである。近年，初期マルクス，エンゲルスにかんする資料がつぎつぎと発掘され，整理されてきているが，——まず唯物史観——正確には，唯物論的歴史把握（materialistische Geschichtsauffassung）という名称を命名した人がエンゲルスであるということ，また唯物史観誕生の書といわれる『ドイツ・イデオロギー』の第

1篇の草稿が「エンゲルスの筆蹟で，エンゲルスのイニシアテイヴで書きおろされて」おり，マルクスは，たんに「加筆修正しているだけにすぎぬ」という事実すら明らかとなってきた現在——唯物史観形成に当って〈第1ヴァイオリン〉を弾いていた人物は，むしろエンゲルスであったと断定できる。

小論では，Ⅰで『ドイツ・イデオロギー』までの若き血に燃ゆるエンゲルスの生活史と人間像を，Ⅱでは，エンゲルスこそ「マルクスに受けるよりもあたえた」思想家であって，少くとも——唯物史観形成にあたっては，〈第1ヴァイオリン〉を弾いていた人は，マルクスではなく，反対に，エンゲルスであった，ということを照明してみたいと思う。

Ⅰ

(1) エンゲルスは1837年9月15日（エンゲルス17才時）にギムナジウムを中途退学して商業見習いの奉公に出ることになる。ギムナジウムを卒業したのち，大学に進学したいというエンゲルスの希望は聞き入れられなかった。というのは，「父は息子にギムナジウムをやめさせ，生徒用の椅子（die Schulbank）を帳場の腰掛け（Kontorbock）に取り換えるように強制[1)]」したからであった。彼はバルメンでさし当り，父（熱狂的・専制的老人）の商会で営業の助手として働くことになった。このギムナジウム在学中に牧師の息子グレーバー兄弟（Pastorensöhnen Graeber）と親交を結んだことは，のちのエンゲルスの思想発展を理解する上で重要である。1838年7月半ば，エンゲルスは父の意のままに，ドイツ最大の商業都市の一ツであるブレーメン市に行って，ブレーメンの領事，同市の貿易商会の所有者ハインリヒ・ロイポルド（Leupold Heinlich）の事務所で商業見習に従事することになった。約3ケ年のブレーメン生活で，「エンゲルスはきわめて有能な商人となったが，しかし彼は一度も，この〈いまいまし

い商売〉に心をよせたことはなかった[2]。」とメーリングは説明している。

ブレーメン市における約3ケ年間は彼に一転機をもたらすことになる。周知のようにブレーメン市は「四ツの自由都市（Freien Städten）の一ツであり……自由主義思想（Liberale Ideen）が広まっていた[3]」町でもあったからである。

エンゲルスは毎日，ロイポルド氏の卸売商店の帳場に出かけた。この帳場仕事は「几帳面さ（Pünktlichkeit），確実さ（Zuverlässigkeit），正確さ（Korrektheit）が必要であった——これらの特性こそ，エンゲルスが一生涯にわたって，きわだって，そなえ[4]」た性格を形成していったものである。また彼の職務には外国語の知識が「無条件に必要とされ，とくに近代語の知識が必要[5]」とされた。そこで彼はオランダやスペインの新聞を読み，さらに文法を修得しようと努力した。彼もまた，始め詩人になろうと思ったようだが，1838年9月17日付のグレーバー兄弟あての手紙で明らかなように，ゲーテの『若き詩人たちのために』および『若き詩人たちのためにもう一言』を読んでから自分の詩作能力に絶望してしまう。

そこで彼は当時ハンブルグで雑誌『テレグラフ・フュア・ドイツチュラント』（Telegraph für Deutschland）を発刊していた文学グループの「青年ドイツ派」（Das Jungen Deutschland）に目を向けた。この「青年ドイツ派」には指導的な作家で文芸批評家として知られているカール・グッコー（Gutzkow, Karl Ferdinand）がいた。そこで彼は，この「青年ドイツ派」の機関紙『テレグラフ』に「ヴツパータールだより」（Briefe aus dem Wuppertal）を投稿してみた。1839年3月のことであった。

グッコーはエンゲルスのこの社会評論風の作品を3回にわたって掲載した。この作品でエンゲルスは「ヴツパータールでは，いかに宗教的神秘主義が生活の全分野を貫き，溌剌とした，たくましい人民生活を窒息させているかを，思慮ぶかく，しかも明瞭に描きだした。彼は敬虔主義の正統派

的本質をあばきだし，その不合理さを証明した。だが18才の若者の批判は，敬虔主義にたいする批判にかぎられはしなかった。エンゲルスは敬虔派の生活様式と社会的惨状とのあいだに存在する密接な関連に気づかせた彼自身の体験にうながされて，彼は人間性にもとる社会状態を暴露し，勤労階級の身の上の責任は工場主にありと結論[6]」した。この時点で彼はすでに革命的民主主義者の立場に達している。ただし彼は，雑誌『テレグラフ』に「筆者が私であることは，どうか厳秘にしてほしい。でなければ自分は〈ひどく困る〉だろうから[7]」と頼み込んでいる。

この匿名のエンゲルスの論文はヴツパータールで「大変な騒ぎ」(rasender Rumor) を巻き起して，『テレグラフ』は全部数が忽ち売り切れてしまったといわれる。ところが，この時期のエンゲルスは「敬虔主義 (Pietismus) とはきっぱりと，鋭く決着をつけたとはいえ，彼はあいかわらず宗教的疑惑 (religiöse Zweifel) におちいっていて，根本的にはまだキリスト教の信仰と対決し終っていなかった[8]。」のだ。いいかえると，「聖書の神は存在するか，しないかという問題に対する答えを[9]」見出すことができなかった時期であった。

ちょうで，その頃，シュトラウスの『イエス伝』(Das Leben Jesu) が公刊される。つまりヘーゲル没後，シュトラウス (D.F. Strauss) が「30年代の半ばに，その著『イエス伝』を著わして[10]」くれたからである。このシュトラウスの見解こそ「18才のエンゲルスにとって宗教と対決するさいの道しるべ (wegweisend)[11]」となったもので，『イエス伝』を信奉することによって，エンゲルスは信仰と対決することになっていく。こうして1839年6月15日，エンゲルスは「理性の審判に耐えうる教義しか神的とは認めない」旨を公言して，合理主義の立場に変り，1839年10月8日，グレーバーあての書簡で明らかのように，信仰そのものを放棄してしまった。彼はハッキリと「信仰よ，さらば」(Adios Glauben!) と公言した。この時，エンゲルスは18才であった。彼が「僕はシュトラウス派だ」

（Ich bin Straussianer）といったのはこの頃であった。こうして「宗教的葛藤から解放されて，エンゲルスはたちまち友人たちとの神学的論争に興味を失い，シュトラウスから，さらにヘーゲル哲学へ」と向って行く。そして，これまでの哲学者について「彼らのなかにヘーゲルにまさるものは断じてない[13]」とまで，ヘーゲルを高く評価するようになる。つまり，エンゲルスは，まったくヘーゲルの信奉者（Anhänger）になってしまう。だから彼は1839年11月13日付のヴィルヘルム・グレーバーあての手紙で「僕はまさにヘーゲル主義者になろうとしているのだ。僕がそうなるかどうかは，もちろんまだ僕にもわからない。しかしシュトラウスが僕にヘーゲルについて光をともしてくれたのであって，この光が事柄を僕にまったく明らかに説明してくれるのだ。彼（ヘーゲル）の歴史哲学は，いずれにせよ僕にとっては僕の書きたがっているとおり書いてある。……こんなに徹底的にはっきりと，またおもしろく書く人はシュトラウスのほかには誰もいない[14]」のだ，と書いている。

彼はさらに2ツの論文『ドイツ民衆読本』（Die deutschen Volksbücher）と『カール・ベック』（Karl Beck）を『テレグラフ』に掲載した。（1839年11月～12月）。しかし1839年を経過していくなかで，『青年ドイツ派』に対する感激は次第に薄れていく。エンゲルスがブレーメン市を去ったのは，1841年3月末のことであった。しかし，この『ブレーメン時代』に「彼が，新聞，雑誌，叢書などに発表した論文，評論，詩は，現存するものだけでも30数篇，寄稿した新聞，雑誌の数は〈一流紙〉を含む6ツにのぼっている[15]」ことを付記したい。

(2) エンゲルスは1841年9月後半から42年8月15日までの志願兵役期間をベルリンの近衛徒歩砲兵隊第12中隊に入隊し，クプファーグラーベン（Kupfergraben）の兵営に入隊して兵役の義務に服することになった。だがエンゲルスは余暇をみてベルリン大学の講義を聴講することにした。ヘーゲル没後すでに約10年の才月が流れ去ってはいたが，いまだに，

「彼の学説は依然として，この大学を支配していた。ヘーゲルの学説は，また，1841年11月に哲学者フリードリヒ・ウイルヘルム・フオン・シェリング（Friedrich Wilhelm von Schelling）がプロイセン反動の委託をうけて，その講義でもって，ヘーゲルとその哲学に反対してたたかうために[16]」招聘されることになった。そこでエンゲルスも「1841年11月15日，ベルリン大学第6講堂でおこなわれたシェリングの〈啓示の哲学〉（Philosophie der Offenbarung）にかんする最初の講義に出席[17]」した。ところがシェリングは歴史的必然性を否定し，キリスト教を弁護した。21才のエンゲルスがアンチ・シェリングの諸著作を発表したのは，この時期である。つまりシェリングの登場した4週間後の1841年12月半ば頃であるが，「――またしてもフリードリヒ・オスヴァルトのペンネームで――『シェリングのヘーゲル論』（Schelling über Hegel）と題するエンゲルスの最初の反論がでた。つづいて1842年春，小冊子（Broschüre）『シェリングと啓示』（Schelling und die Offenbarung）と『キリストにおける哲学者シェリング』（Schelling der Philosoph in Christo）が――こんどは匿名で――[18]」公刊された。

エンゲルスのシェリングに対する，この「断乎たる闘争」（der entschlossene Kampf）が青年ヘーゲル学派に歓呼して迎えられたことはいうまでもあるまい。こうして彼は，ベルリン到着後まもなく青年ヘーゲル学派の仲間入りすることができた。だから軍務の自由時間の多くを「郵便街の居酒屋〈アルテ・ポスト〉（Alte Post）に集って[19]」過すことになる。

エンゲルスは青年ヘーゲル学派のひとりとして，仲間から尊敬されるようになる。いうまでもなく，青年ヘーゲル学派とは，当時きわめて有能な注目すべき人材の集りで（その数人のものは天才的人物とさえ考えられる），彼らの志向した問題は「根本的には無神論者で革命家である内面的（esoterisch）なヘーゲルと，時と政治権力と妥協した外面的（exoterisch）

なヘーゲルを区別[20]」することであり，ヘーゲルのなかから革命的な急進的な思想を引き出し，「ヘーゲル哲学を急進的な方向へ発展(die radikale Weiterbildung) さす道」を切りひらこうとしていた人たちであった。これら非凡な青年ヘーゲル学派が若きエンゲルスに深刻な哲学的影響を与えたことは，あらためていうまでもない。

エンゲルスはこの時期に，18世紀のフランスの哲学者たちを研究し，エドガー・バウアー (Edgar Bauer) と共同で『厚かましくも脅かされたが，奇蹟的に救われた聖書』 (Die frech bedräute, jedoch wunderbar befreite Bibel) というパンフレットを書いたりした。

ベルリンでの兵役を終えたあと1842年10月10日頃，エンゲルスはいったん両親の家に帰った。しかも，その10月に書いたのが「プロイセン国王フリードリヒ・ウイルヘルム4世」 (Friedrich Wilhelm Ⅳ・König von Preussen) という論文で，この論文は『スイスからの21ボーゲン』(Einundzwanzig Bogen aus der Schweiss) に掲載公刊されることになる。いまや彼は，青年ヘーゲル学派の仲間入りをしたとはいえ，ここで「彼は青年ヘーゲル学派の主観主義 (Subjektivismus) を拒否し，……観念論の立場一般を捨てる第一歩をふみ[21]」出すことになる。というのは，彼をそのように駆り立てた一冊の著作が現われたからである。それがフオイエルバッハの『キリスト教の本質』 (Das Wesen des Christentums. 1841) だったのだ。フオイエルバッハは宗教とヘーゲルの観念論を排撃し，「自然と人間を唯物論的に考察すべき」必要を説き，「自然・物質が第一次的で人間とその意識から独立して実在する」ものなのだ，と述べ「宗教は人間の産物である。神が人間をつくったのではなくて，人間が，自分自身の，人間的な姿に似せて神をつくったのである[22]」と書いた。

エンゲルスは，フオイエルバッハを読んで，その唯物論的・無神論的・人間主義に多大の感銘をうけ，唯物論に転換することになる。こうして彼は「フオイエルバッハの影響のもとに，唯物論の地盤に移行しはじめ，青

年ヘーゲル主義（Junghegelianismus）と手を切りはじめ[23]」そして，遂には「ベルリン滞在の最後の数ケ月中，すでにますますヘーゲル学派から身をひいて[24]」しまうことになる。

こうしてエンゲルスは，すでに1842年半ばに唯物論に移行してしまった。この時期の前後から，彼はグッコーの『テレグラフ』誌への寄稿を止めて『ライン新聞』や『ドイツ年誌』に鞍替えをする。そして彼は「1842年4月から『ライン新聞』に論説を発表[25]」するようになる。

1842年11月24日頃，彼は「マンチエスターにおもむいて父の工場で働くために，ふたたび郷里の都市をあとにし[26]」なければならなくなった。この旅の途中，彼はケルンに逗留した。そして『ライン新聞』を訪れてマルクスと出合う。だがマルクスとエンゲルスの第1回目の会見は「マルクスが自由人たちと決裂したばかりのころだったので，2人の挨拶はすこぶる，そっけないものだった。エンゲルスはバウアー兄弟の手紙によって，マルクスに反感を抱いていたし，マルクスのほうは，エンゲルスをベルリンの自由人たちの同志とみていた[27]」から，この2人の最初の会見は頗る冷やかなものであった。それから21ケ月をエンゲルスはイギリスで暮すことになる。

(3)　1842年11月，エンゲルスはイギリスの土地を踏んだ。エンゲルスにとって21ケ月の在英期間は，マルクスにとってのパリの1ケ年余がもつと同じ意味をもつものであった。というのは，2人とも青年ヘーゲル学派として出発し，外国で全く同じ結論に達したからである。つまり「マルクスは時代の闘争と時代の願望をフランス革命によって了解したが，エンゲルスはイギリス産業によって了解した[28]」からである。エンゲルスにとってイギリスの生活はまったく感動的なものであった。産業革命後のイギリスは彼に「資本主義の支配的な，完全に展開した姿」を示していた。すでに「イギリスは資本主義の母国（Mutterland），世界の銀行家，世界の工場（industrielle Werkstatt）であった。同国は社会発展のうえでドイツに

一時代まるまる（eine ganze Epoche）先んじていた[29]」という状態だったからである。しかし，それだけに，イギリスでは新しいブルジョア社会の矛盾がムキ出しに露呈されていた。「資本主義的生産の規模と階級間の闘争の激しさは彼をひどく驚かせた。ドイツとはまったく別な諸関係が支配していた[30]」こともエンゲルスには驚異だった。エンゲルスは階級闘争のために，イギリス労働者たちが結集しているのをみた。しかも「1824年には，労働者たちは労働組合，すなわちトレード・ユニオンの正式の承認(die offizielle Anerkennung）をブルジョアジーから奪取[31]」していた。しかも，これらの闘争の「先頭に立っていたのは，チャーテイストたち[32]」であった。

エンゲルスは，父が共同で所有している「エルメン・エンゲルス商会」のマンチェスター綿紡績工場ヴイクトリア・ミル(Victoria Mill)の帳場で働くことになった。しかも，このマンチェスターこそ，チャーテイスト運動の中心地でもあったのである。そこで彼は「マンチェスターではじめて，たたかう工業プロレタリアートにめぐりあった[33]」ことになる。

こうして若冠22才のエンゲルスは，「資本主義社会では，経済的利害が人間のすべての信念と行動の中心点（Mittelpunkt）である[34]」という確信をもつにいたった。のみならず，労働者が――「労働時間の短縮であれ，賃上げであれ，選挙権であれ――のためにたたかい，真に人間的な歴史の進歩を目ざす目標を擁護するさまを[35]」確認することができた。

エンゲルスは「空想的社会主義者やチャーテイストたち，また彼らの正式の機関紙『ザ・ニュー・モラル・ワールド（The New Moral World)』や『ザ・ノーザン・スター（The Northern Star)』と密接な関係をむすんだ。チャーテイストの『ノーザン・スター』の指導者ジュリアン・ハーニー（Julian Harney）とは個人的に知り合い（1843年秋）[36]」になったばかりか，この時以来，生涯にわたる友人の間柄になっていく。またチャーテイストの定評のある指導者の一人のジェームス・リーチ

(James Leach) とも親交を結ぶ。何と若冠22才のエンゲルスはイギリスのプロレタリアートに彼の全関心を注ぎ，その運動を注目していたのである。

またエンゲルスは，たんにチャーテイストの指導者たちと緊密な交際を結んだばかりでなく，「イギリス在住のドイツの共産主義者たちとも関係をむすんだ。これらの共産主義者は非合法の〈義人同盟〉 (Bund der Gerechten)」[37]という名称で組織されていた。同盟の指導的な思想的代表者は，ヴイルヘルム・ワイトリンク (Wilhelm Weitling) であり，同盟の本部はパリとロンドンにあった。

若きエンゲルスは革命的ドイツ人労働者たちとも出合って，同盟の指導的人物，ハインリヒ・バウアー (Heinrich Bauer)，ヨーゼフ・モル (Joseph Moll)，カール・シャッパー (Karl Schapper) と知り合うことができたし，美しい紡績女子工員メアリー・バーンズ (Mary Burns) と知り合いになった。エンゲルスは「子供の時分からプロレタリアートの貧乏と闘争を知っていた〔この〕メアリーといっしょに，マンチェスターの労働者地区を歩き」[38]廻ったりした。このメアリー・バーンズがエンゲルス夫人となった婦人である。

またエンゲルスが若きドイツの詩人ゲオルク・ヴエールト (Georg Weerth) (当時はマンチェスター北部のブラッドフオード (Bradford) に在住) と親交を結びえたのも，この頃のことであるし，イギリスやフランスの空想的社会主義者，ロバート・オーエン (Robert Owen)，シャルル・フーリエ (Charles Fourier) やサン・シモン (Saint-Simon) の著作を熱心に読みふけったのも，この頃であった。

さらに彼は，イギリス古典派経済学の研究を始め，1843年末には，ブルジョア社会の経済的構造を社会主義の視点から批判した論文「国民経済学批判大綱」 (Umrisse zu einer Kritik der Nationalökonomie) を執筆した。この論文でエンゲルスは「ブルジョア経済学，すなわち私的所有のた

めにのみ存在している《完結した致富学》（Komplette Bereicherungswissenschaft）を鋭く[39]」攻撃する。（エンゲルス23才時）。

この論文は，1844年2月公刊の『独仏年誌』に投稿されるため，編集者のマルクスのもとに送られることになる。この論文がマルクスに与えた衝撃の巨大さは，小論のⅡで詳しく述べるが，このエンゲルスの論文がマルクスに非常に大きな印象を与えたことは，マルクスのノート・ブックに長い抜書があることから十分に証明できる。このエンゲルスの論文は始めてマルクスに「資本と労働とが経済生活の対立的ではあるが相互補完的な範疇であることを教えた。それは，彼が最近探し求めていたところの，経済学の混沌たる宝庫に入る鍵を与えた。またそれは，この科学が革命の哲学において如何なる役割を果し得るか，を明らかにしてくれた[40]」という意味でマルクスに与えた衝撃はきわめて大きい。また，もう一つの論文『イギリスの状態・トマス・カーライル「過去と現在」ロンドン・1843年』（Die Lage Englands, ,,Past and Present'' by Thomas Carlyle, London, 1843）も1844年2月『独仏年誌』に掲載されたが，エンゲルスが，この論文で「労働者だけが……イギリスを救う力」をもっているものとして，「イギリスを救う力は，彼らのなかからでてくる[41]」点を指摘したことは重要である。まさしく『独仏年誌』におけるエンゲルスの諸論文は「哲学的な点でも，経済的，政治的な点でも，エンゲルスの世界観の発展に新紀元が開始[42]」されたことを意味するものであり，マルクスに先んじて，彼の世界観の紀元の開始を訴えているものである。とくに「イギリス労働者だけが，イギリスを救う力をもつ」という「プロレタリアートの歴史的役割にかんするエンゲルスのテーゼ（命題）は天才的発見[43]」と呼ぶにふさわしいものであって，「プロレタリアートの現実的闘争こそが社会主義への唯一の可能な移行手段だという理解[44]」に到達していたということはエンゲルスが空想的社会主義と訣別したことを示している。1844年2月，論文『イギリスの状態・18世紀』（Die Lage Englands, Das achtzehnte Jahrhundert）

を執筆。(8月31日から9月11日まで『フォアヴェルツ』(Vorwärt!)誌に掲載)，1844年3月，論文『イギリスの状態・イギリス憲法』(Die Lage Englands. Die englische Konstitution)を執筆。(9月18日から10月19日まで『フォアヴェルツ！』誌に掲載)。後者の論文では「単なる民主主義には社会的害悪をただす力はない。民主主義的平等は一つの幻想(eine Chimäre)であり，……そこから，ただちに一つの新しい要素……一原理が，発展してくるにちがいない。この原理とは，社会主義の原理である。」[45]と早くも断言している。

(4) 1844年8月末，エンゲルスはイギリスを去る。ドイツへの帰途，彼はパリにマルクスを訪ねた。『独仏年誌』への寄稿以来，エンゲルスはマルクスと文通していたからである。エンゲルスがパリに到着したとき，「マルクスはちょうど彼の『手稿』の執筆をはじめていた」[46]ところだった。2人の間に思想と行動の上で共感が湧き出て，エンゲルスは10日間パリに留った。しかしエンゲルスの目からみると「マルクスの疎外論的発想には違和感が残った」[47]に違いないのである。つまり「大胆な推測をくだせば，パリでマルクスと会った時に交わした経済学方面での対話から，エンゲルスは，マルクスがいかにも経済学の初心者だという印象を得たのではあるまいか」[48]と広松氏は説明しておられる。

このエンゲルスとの対話ののち「マルクスはいまや経済学にひきいれられ，彼の研究の中心点は，資本主義の経済的諸関係の分析に」[49]移っていくことになる。つまり，エンゲルスは既に「先進的な産業経済の様相をマルクスに教えることのできる見識をもつ人物」[50]になっていたということが理解できよう。

こうしてマルクスはエンゲルスという戦友に廻り合い，しかも，理論的に基本的な点では，意見が一致していることを確認した。エンゲルスはまだパリに滞在しているうちに，「マルクスがちょうど執筆中の論争書(Streitschrift)に協力論文を」[51]書く。エンゲルスの協力論文はわずか1ボ

ーゲン半だったのに，マルクスは20ボーゲンに引きのばして，題名を『神聖家族』（Die Heilige Familie）として，1845年2月，フランクフルト・アム・マインから出版された。この『神聖家族』の評判はユンクなど少数の人びとの賞讃をうけたとはいえ，それほど芳しいものではなく，一言でいえば駄作（Machwerk）だった。

(5) エンゲルスがバルメンに帰ったのは1844年9月初旬であるが，帰るとすぐ，彼は「ライン州に定住して活動している社会主義者たちと連絡をとろうと努めた。インテリが主であった。彼らの指導的理論家は政論家（Publizist）のモーゼス・ヘス（Moses Hess）で，彼は1842年末『ライン新聞』では社会主義的観念——とくに空想的社会主義的性格のそれ——を鼓吹していた。このサークルの中心はケルン[52]」であった。1844年の秋，エンゲルスはヘスやケトゲン（G.A.Köttgen）らとエルバーフェルトで運動を始め，公開の集会を組織し，1845年2月には，エンゲルスも講演した。（24才時）。これらの宣伝活動は政府を驚かせ，プロイセン内務大臣の指令により中止させられた。エンゲルスは義人同盟（Bund der Gerechten）のパリ班とも，ロンドン班とも接触を続け，イギリスのチャーテイストたちとも連絡が絶えぬよう配慮し続け，『ザ・ニュー・モラルワールド』にも数篇の論文を寄稿し，またマルクスとの定期的文通を続けていくなど，精力的に活動した。

また，バルメン到着以来，『イギリスにおける労働者階級の状態』（Die Lage der arbeitenden Klasse in England）の執筆を始めた。本書は1845年5月末に，オットー・ヴィガント書店（Verlag von Otto Wigand）から出版される。——本書において彼は，政府の《青書》（ブルーブック）からイギリスの労働条件の完膚なきまでの非難を引き出すというやりかた——マルクスは『資本論』の中で非常に能率的にこれをまねたのだが——のお手本を示した[53]。本書でエンゲルスは「イギリスのプロレタリアートがブルジョアジーとは和解しがたく対立していることを，巨細にわたって証

明した。ブルジョアジーの利害と，労働者の利害とは，正反対(diametral entgegengesetzt) であると，彼は明言した。彼は，両階級のあいだの闘争が必然であることをくわしく解明し，プロレタリアートが，この闘争を行なうのは完全に根拠のあることであることを立証した。階級闘争は，資本主義社会の法則にのっとったものであり，ブルジョアジーに対するプロレタリアートの抵抗と格闘は，真に人道的なものである[54]」ことを立証した。

本書がマルクスに与えた衝撃も測り知れぬくらい大きい。というのは，本書はイギリスの現状分析と展望を示しているものではあるが，もし「〈哲学的な糖衣〉で包めば即座に〈体系〉となりえたもの[55]」だったからである。たとえば，周期的恐慌 (die periodischen Krisen) の問題にしてもエンゲルスは本書で手短かに論じているが，これに示唆をうけたマルクスは『経済学ノート』や『経・哲手稿』以来，「リカードや J.B. セイを非難して，〈資本〉は元来，生産力を無制限に発展させる傾向をもっているにもかかわらず，この〈資本〉が労働大衆の消費をせまい限界内に釘づけにしている，その矛盾について彼らはあまりにも無理解だ[56]」という認識に達する。そののち2人の研究の結果，「2人の友がはじめ信じていたように，古典的資本主義における平均循環周期 (Die Dauer des Zyklus) は6年から7年ではなくて，7年から10年であることが明らかとなり[57]」ずっとあとになって，マルクスがこれを体系化して展開していくのである。だからマルクスは十数年余もたった後でさえ，なお彼はエンゲルスの，この著作を讃えて「エンゲルスは何と鮮かに，情熱的に，鋭く先取りして，また学者的学問的思いわずらいをせずに事態を把握していたことか！」と賛嘆している。

本書に対して，『文学談話新聞』 (Die Blätter für literarische Unterhaltung) などは，この書物は永続的な価値をもつ，とさえ讃えたくらいだったし，またエンゲルスが，本書の原稿料の第1回目の受取り分をマ

ルクスに贈ったことは周知の通りである。

(6) 1845年4月初め，エンゲルスはバルメンを去ってブリュッセルに住む。「父親との確執その他一身上の理由から彼はいずれ家を出る心算であったが，弾圧の強化がタイムテーブルを縮めた[58]」のであった。つまりエルバーフェルトの集会その他の実践活動が災いして，彼は要逮捕の注意人物と思われたが，名門エンゲルス家の体面を考慮して国外追放という条件で，エンゲルスを追放処分にしたものといわれる。

1845年7月半ばのことであるが，「エンゲルスは，マルクスといっしょにイギリスにおもむいた。彼らは，その地で彼らの経済的知識をふかめ，義人同盟やチャーティストの指導者たちと密接な連絡をとりたいとおもった。イギリスの生活，イギリスの工業，また労働者の組合組織や政治組織をマルクスに紹介することは，エンゲルスには喜びであった。友人同士の精神的な影響の及ぼしあいという点からみて，この旅は大きな役割を演じた。マルクスは，これらの週間に，空想的社会主義のなおいっそう熱心な研究にむかう主要な刺激を，エンゲルスからうけ，2人で共同で，この国の経済的・社会的・政治的諸問題の研究をおこなった。2人の旅の最初の滞在地は，マンチェスターだった。彼らはチェタム図書館（Cheth-am-Bibliothek）にでかけて，大陸では入手困難な比較的古いイギリスの文献を読んだ。……8月，マルクスとエンゲルスは，さらにロンドンにむかって旅をつづけた。彼らは，先年来ますます国際的性格をおびはじめてきた〈義人同盟〉の指導者たちと会った。……それと同時にエンゲルスは，チャーティスト左派の指導者たちとの関係を更新し，マルクスにジュリアン・ハーニーや彼の友人たちを紹介する労を[59]」とった。つまり，ここでもマルクスをいつもリードしていたのは，年若いエンゲルスの方だった，のである。

1845年8月24日頃，マルクスとエンゲルスはイギリスからブリュッセルに帰った。ブリュッセルに戻ったのちも，エンゲルスは『ノーザン・ス

ター』紙の定期的寄稿者になって，寄稿を続ける。

この当時，エンゲルスは真正社会主義者（die wahren Sozialisten）と対決しなければならないことを痛感するようになる。マルクスにしろ，エンゲルスにしろ，亡命者であったから，ドイツの民主主義的機関誌紙には，わずかの影響力しかなかった。ところが1845年以後，フランスやイギリスの義人同盟本部内ですら，真正社会主義的観念が拡まっていき，平和的空想的傾向が同盟内で新しい勢力になりつつあったからである。真正社会主義者とは，「彼らは，現実から出発するかわりに，ある社会の空想的理想像をつくりあげ，現実をその尺度ではかった。彼らは，政治革命にたいして，平和な〈人間的〉（menschliche）解放というテーゼを対置し，社会主義的社会秩序のためのプロレタリアートの革命的闘争を拒否し，そのことによってまた，さしあたりドイツで遂行されなければならないブルジョア民主主義的権利と自由を獲得するための闘争にたいして，否定的態度をとることを正当化[60]」していた人たちであった。しかし真正社会主義は「ドイツの民主主義運動によってなしとげられるべき，あの革命的任務を成就する能力をもたなかった。その代表者たちは，労働者階級の歴史的役割を否認し，労働者階級のかわりに，インテリを指導的な社会勢力[61]」とみなしていた。

そこで2人は「両人の新しい世界観，つまりプロレタリア世界観の詳しい叙述〈ドイツ哲学とこれまでのドイツ社会主義にたいする論争書〉をさきに出す決心をした。6ケ月間の共同の仕事の成果が『ドイツ・イデオロギー』という標題をつけた膨大な草稿——哲学のうえで科学的共産主義の根本的基礎をつくりあげた一著作[62]」となったものである。

こうして『ドイツ・イデオロギー』ができあがっていったものであるが，——しかし重要な点は次のことなのである。つまり，「従来の研究者たちは，〈唯物史観誕生の書〉と俗称されるブリュッセル時代の記念碑的労作『ドイツ・イデオロギー』の中枢部，すなわち〈第1篇，フォイエル

バッハ，唯物論的な観方と観念論的な観方との対立〉がエンゲルスの執筆になることを無視してきた。……この遺稿で第一ヴァイオリンを弾いたのがエンゲルスであることには疑いを容れるに難い」[63]ということが明らかになってきたことである[63]。

遺稿『ドイツ・イデオロギー』は2巻用6篇の厖大な手稿で，「そのうち第1巻第1篇〈フォイエルバッハ・観念的な観方と唯物論的な観方との対立〉だけが未定稿，他の5篇は浄書稿[64]」から成っている。『ドイツ・イデオロギー』が，マルクスとエンゲルスとモーゼス・ヘスの共同執筆とヴァイデマイヤーの協力によって，出来上ったものであることは確かであり——また唯物史観が『ドイツ・イデオロギー』において確立されていることも確かであるが——「それが既にウァテクストの時点で，エンゲルスによって確立されていると附言することができよう[65]」そして，唯物史観が確立したのは，遅くとも1846年の正月か，恐らくは1845年末頃までの時点で，エンゲルスによって確立されていたものと思われる。つまり，これまでの時点では〈第1ヴァイオリン〉を弾いていた人物はエンゲルスであったといえる。

注 1）''Friedrich Engels. Eine Biographie'' Dietz Verlag Berlin, 1970. S.21. ゲムコー編『フリードリヒ・エンゲルス伝記』（上）土屋・松本訳 大月書店 1972年，20頁。
2）メーリング『マルクス伝』（I）前掲，169頁。
3）Eine Biographie, op.cit., S.24. 邦訳，前掲，22頁。
4）ibid., S.27. 同書24頁。◦印引用者。
5）ibid., S.26. 同書24頁。◦印引用者。
6）ibid., S.32. 同書28頁。◦印引用者。
7）メーリング『マルクス伝』（I）前掲，172頁。
8）Eine Biographie, op. cit., S.33. 邦訳，前掲，29頁。
9）ibid., SS. 33～34. 同書30頁。
10）ibid., S.35. 同書31頁。
11）ibid., S.35. 同書31頁，◦印引用者。
12）ibid., S.37. 同書32頁，◦印引用者。
13）ibid., S.37. 同書33頁。

14） M.E.W. Bd 41. S.435.『マル・エン全集』第41巻，460頁。
15）広松渉『エンゲルス論』盛田書店，1968年，38頁。
16） Eine Biographie, op. cit., S.50. 邦訳，前掲，43頁。
17） ibid., S.51. 同書44頁。
18） ibid., S.51. 同書44頁。
19） ibid., S.52. 同書45頁。
20） G.Lukács, Der junge Marx, op. cit., S.8. 邦訳，前掲，9頁。
21） Eine Biographie, op. cit., S.54. 邦訳，前掲，47頁，。印引用者。
22） ibid., S.55. 同書47頁。
23） ibid., S.55. 同書47頁。
24） ibid., S.57. 同書49頁。
25） ibid., S.56. 同書48頁。
26） ibid., S.58. 同書50頁。
27）メーリング『マルクス伝』前掲，177頁。
28）同書，178頁，。印引用者。
29） Eine Biographie, op. cit., S.64. 邦訳，前掲，52頁，。印引用者。
30） ibid., S.64. 同書53頁，。印引用者。
31） ibid., S.65. 同書53頁。
32） ibid., S.65. 同書53頁。
33） ibid., S.66. 同書54頁，。印引用者。
34） ibid., S.66. 同書54頁，。印引用者。
35） ibid., S.67. 同書55頁。
36） ibid., S.70. 同書57頁。
37） ibid., S.70. 同書58頁。
38） ibid., S.73. 同書59頁。
39） ibid., S.80. 同書64～65頁，。印引用者。
40） E.H. カー『カール・マルクス』邦訳，前掲，56～57頁，。印引用者。
41） Eine Biographie, op. cit., S.81. 邦訳，前掲，65頁，。印引用者。
42） ibid., S.81. 同書65～66頁，。印引用者。
43） ibid., S.81. 同書65頁。
44） Ernest Mandel: Entstehung und Entwicklung der ökonomischen Lehre von Karl Marx, op. cit., S.17. マンデル『カール・マルクス』邦訳，前掲，21頁。傍点原著者。
45） M.E.W. Bd 1. S.592.『マル・エン全集』第1巻，前掲，649頁，。印引用者。
46） Eine Biographie, op. cit., S.94. 邦訳，前掲，76頁。

47）広松渉，前掲，220頁。
48）同書226頁，。印引用者。
49） Eine Biographie, op. cit., S.95. 邦訳，前掲，77頁，。印引用者。
50） J.Lewis, The Life & Teaching of Karl Marx, op. cit., p.74. ルイス『マルクスの生涯と思想』邦訳，前掲，61頁。
51） Eine Biographie, op. cit., S.95. 邦訳，77頁。
52） ibid., S.100. 同書80頁。
53） E.H. カー『マルクス』前掲，58頁，。印引用者。
54） Eine Biographie, op. cit., S.105. 邦訳，前掲，85頁。
55）広松渉，前掲，212頁。
56） Mandel, op. cit., S.65. マンデル『カール・マルクス』邦訳，前掲，92頁。
57） ibid., S.70. 同書98頁。
58）広松渉，前掲，242頁。
59） Eine Biographie, op. cit., SS.112～113. 邦訳，前掲，90～91頁，。印引用者。
60） ibid., S.114. 同書92頁。
61） ibid., S.115. 同書92頁。
62） ibid., S.116. 同書93頁，傍点原著者。
63）広松渉，前掲，243～244頁，。印引用者。
64）同書275頁。
65）同書305頁，。印引用者。

Ⅱ

以下，マルクスと対比して述べる。まず唯物史観——正確には〈唯物論的歴史把握〉（materialistische Geschichtsauffassung）という名称を命名したのがエンゲルスだということが解ってきたことである[1]。マルクスが〈第1ヴァイオリン〉を弾いていたのなら，エンゲルスが命名することはおかしい。唯物史観はリープクネヒト（W.Liebknecht）が確言しているように，「マルクスの〈発見〉したものではない（not ''discovered'' by Marx）」[2]し，ブルーメンベルクは「それが後にエンゲルスによって〈唯物史観〉と命名された[3]」とハッキリ書いている。そこで，唯物史観誕生ま

で，どちらが〈第1ヴァイオリン〉を弾いていたかを資料にもとずいて追跡してみよう。

(1) まず，マルクス自身，1864年7月4日付の手紙で，マンチェスターにいたエンゲルスにあてて，「君には，(1)僕にはすべてが遅くやってくるということ，(2)僕はいつも君の足跡について行く（ich immer in Deinen Fusstapfen nachfolge）ということがわかるだろう[4]」と書いているが，いったいマルクスがエンゲルスに追従（nachfolgen）してきた，という告白的表現を，どう考えるべきであろうか。

マルクスの学生時代からの学修状況から——エンゲルスとの対比という意味で，——考察してみよう。マルクスが「大学で専攻したのは，法律学であって，それも哲学と歴史を勉強するかたわらに副次的な学科として修めたにすぎない」（『経済学批判』序説）のであって，マルクスの「大学での研究中には，経済学には，ほとんど関心を示していなかった。ベルリンで現存する研究リストには，この学問（経済学）にかんするものは，まったくふくまれていない[5]」というのが実情であり，マルクスは，いわば経済学については素人であった。

それでは自然科学方面はどうか，というと，「若い頃のマルクスは自然科学の方面にも熱意をもたず」，マルクスは「ベルリン大学に移ってからも，自然科学の方面は履修していない。少くとも，ボン〔大学〕時代のマルクスは自然科学などに時間をさけるような状態にはなかったと忖度される[6]」という状態であった。だから「1836年初め頃と推定される父の手紙に〈物理と化学の講義が本当にそんなにひどければ……ベルリン大学に移ってから受講すればいいだろう〉という条（くだり）がある[7]」くらいだが，この父の忠告もベルリンでは果せなかった。のみならず「ギムナジウムの卒業試験の成績と答案からみるに，古典語が偏重された当時の一般的傾向を斟酌するにしても，数学や物理は苦手だった様子である。物理と数学の答案（MEGA 所収。マルクスを傷つけるという配慮からであろう

か，M.E.W. ではオミットされている！）を今日の高校生からみれば，いかに150年前のドイツとはいえ，よくも卒業させてもらえたものだ，と感心することであろう。化学はともかくとしても，ボン大学での物理の講義がもし本格的なものであったとすれば，ギムナジウム時代の不勉強がたたって，とうていフォロー（follow）できなかったという見方もなりたちうるであろう[8]」という程度の低い学力水準であったのみならず，マルクスが「後年においても初等的な計算が不得手であったこと，ギムナジウムの第1年度を2回も履修していること，総じてギムナジウム時代の成績が余り芳しく[9]」なかったし，自然科学方面にかんするコンプレックスは後年にいたるまでマルクスの研究上の負担になっていたらしく，エンゲルスにあてて，「僕には力学の問題が言葉の問題と同じくらい厄介だ[10]」とこぼしているから，マルクスはこの分野でも，たえずエンゲルスの助言を必要としていたものであろうと想像される。ギムナジウムの卒業試験では「宗教が思わしくなく，また歴史もよくなかった[11]」ことは周知の通りである。ただ一つだけ，マルクスがフリードリヒ・ヴィルヘルム・ギムナジウムの卒業にあたって書いたドイツ語の作文「職業の選択にあたって一青年の考察」(Betrachtung eines Jünglings bei der Wahl seines Berufes) は，マルクスの独創性を示すものとして有名であったが，これとてもマクレランの報告によると「このエッセイはテーマも構成も，マルクスの仲間の生徒 (Marx's fellow pupils) のものとほとんど同じである[12]」という事実がわかってきたので，格別にマルクスの独創性を示すものとはいえないようである。

1837年11月10日付の父あての手紙で示されているように，マルクスがベルリンに着くと「ひたすら学問と芸術に沈潜（versinken）しよう」と努め，「ヘーゲルを始めから終わりまで（Hegel von Anfang bis Ende)，彼の多くの弟子たち〔の著作〕ともども学び知」ろうと努めたことは確かである。またハッキリと書いているように「私の最後の命題はヘー

ゲル体系の発端だったのでして，この仕事のために私は自然科学，シェリング，歴史をある程度知るようになったのですが，この仕事はきりもなく私の頭を痛めさせてくれたものでした[13]」と述べ，「いまではもう自分でも，ほとんどそれを理解することができない（kaum wieder hineindenken kann）」くらいです——と告白しているから，この時期のマルクスが大学の教室から学問的教養を深めることはできなかったものと推察される。

ところが1837年の春，マルクスが胸部疾患のため，ベルリン郊外のシュトラロウ村（Stralow）で療養していた頃，散策の途上でルーテンベルク（Rutenberg）と識り合い，ルーテンベルクの紹介でドクトル・クラブのサークル（Kreise jenes Doktorklubs）に参加することになる。このクラブのメンバーはカフェー・シュテーリで定期的に会合していたが，むしろ，このドクトル・クラブの方がマルクスの人間形成・思想形成に果した意義が大きい。（マルクス20才時）ドクトル・クラブは「青年ヘーゲル学派の運動の中で指導的な役割を演じるようになったもので，それは哲学的かつ政治的な前衛（Avantgarde）」[14]というべきものであった。マルクスは，その後もっぱら哲学の専門的研究に没頭するようになり，「その激しい勉強ぶりを示すのが学位論文，とくにその厖大な下書き[15]」となったものである。学位論文は1841年4月6日，イエナ大学の哲学科に提出され，4月15日にドクトルの学位記が授与されている。この学位論文のなかでマルクスが「哲学の止場（Aufhebung）すなわち現実化（Verwirklichung）こそ，時代に適合した（Zeitgemässige）課題[16]」だという認識に達したのは，彼の並々ならぬ努力の結果に違いない。

だが要するに，エンゲルスが1892年9月28日付の手紙（メーリングあて）で明らかにしたように，ボンとベルリン大学でのマルクスの研究年月にふれて「マルクスは，経済学にかんしては，絶対に，何も知らなかった（von ökonomie weisste er absolut nicht）」[17]のであって，あとで述べる『ライン新聞』の時代に，やっと「経済学の批判の入口（Schwelle）」[18]に

辿りついた程度で，社会主義についても，すこぶる曖昧な形（noch unbestimmte Bekanntschaft）でフランス社会主義と共産主義を知っていたにすぎない。なるほど1842年の始め頃，マルクスは「フォイエルバッハを信奉することを表明したのだが，しかし，その態度は，なおごくおおざっぱ（大雑把）なものであって，まだヘーゲルの方法を根本的に変革するところまではいっていなかった[19]」ような状態であった。

(2) 教職をうる代りに，マルクスは『ライン新聞』（1842年1月1日以来，ケルンで発刊）の寄稿者となり，10月15日，この『ライン新聞』の主筆に就任。（24才時）。それ以後，約5ケ月間『ライン新聞』の編集者（Redakteur）として論陣を張ることになる。ここで当時のマルクスの思想状況を偲ばせるものは，1842年10月16日付，第289号に掲載されている彼の論説である。つまり，アウグスブルクの『アルゲマイネ・ツァイトゥング』（Ausburger Allgemeine Zeitung）が『ライン新聞』を共産主義のシンパではないかと疑った時，マルクスは次のように答えている。すなわち『ライン新聞』は「今日の姿における共産主義思想にたいしては，理論的な現実性さえみとめておらず，したがって，それの実現はなおさらねがっておらず，あるいはこれを可能とさえ考えることができないのであるから，これらの思想にたいして，根本的な批判をくわえるであろう[20]」と述べていることである。注意すべき点は，エンゲルスの方は，この時点で早くも「国内危機」（Englische Ansicht über die innern Krisen）で社会革命を予告しているのだ。ともかく『ライン新聞』の時代にマルクスの注意が「抽象的なものから現実的なものへ」（from abstraction to realities）向け変えられたことは，マルクスにとって大きな前進と考えられよう。

『ライン新聞』そのものは，結局，1843年3月31日に発行を禁止されてしまう。その後マルクスはクロイツナハへ出発し，イエニーと婚姻契約書（Ehevertrag）は1843年6月12日，クロイツナハで署名されている。マルクスは10月末まで同地に（5ケ月間）滞在。その間に「かれは多く

の歴史，とくにフランスの歴史を読んだ。とりわけフランス革命を注意深く研究した。かれがルソー（Rousseau）モンテスキュー（Montesquieu）マキアベルリー(Machiavelli)についての徹底的で批判的な研究をしたのは，この時代がはじめて[21]」なのだ。かたわらマルクスはヘーゲル法哲学の批判的再検討をすすめつつ，『独仏年誌』のための論文の準備に忙しかったようである。パリに行ったのは11月11日であった。要するに『ライン新聞』時代のマルクスは「封建制から資本主義への移行期における共有財産（Gemeinbesitze）の横領（Usurpation）という経済史については，まだ知ってはいなかった。かれは封建階級とブルジョアジーの資本主義的な諸要求にたいして，政治的には急進的な，哲学的には観念論的なジャコバン主義者（Jakobiner）としてたたかった[22]」にすぎず，フォイエルバッハの影響といったところで，まだ断片的（sporadisch）にみられる程度で，「自覚的な社会主義に転化する直前の段階[23]」に，やっと到達したといえる程度だったと推定される。クロイツナハに滞在していた期間に，マルクスは，フォイエルバッハの『哲学改革のための暫定的命題』（Vorläufige Thesen zur Reformation der Philosophie, 1842）の影響をうけて唯物論へ移行していく。(注。エンゲルスは既に1842年に唯物論に移行)。しかも1843年の始めの頃のマルクスには「もっとも重要な基盤であるプロレタリア階級の見地がまだ欠けて[24]」いたのであった。

（3）ルーゲ（A.Ruge）の申し出でに応じて，マルクスが『独仏年誌』発刊のため，パリに到着したのは1843年11月であった。『独仏年誌』は当然「ドイツとフランスの接近に役立つはずの雑誌」だったのに，フランス人は「それが無神論の立場（atheistische Einstellung）に立っているからだめだ[25]」として，同誌への協力を拒否してしまった。マルクスは，時折フランス人労働者の集会（Arbeiterversammlungen）に出かけていく。しかも感銘を受けていたようである。詩人ハイネと親交を結んだのも，この頃で，ハイネの『冬物語』や『織匠の歌』は1844年に書かれている。と

もかくマルクスは「パリにおいて初めて労働者階級の革命的分子と出会うこと」[26]になるのである。

『独仏年誌』は1844年3月の初めに出版され，マルクスは「ユダヤ人問題によせて」（Zur Judenfrage）と「ヘーゲル法哲学批判・序説」（Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie. Einleitung）の2論文のほか，〔1843年3月～9月〕の期間におけるルーゲとの往復書簡を掲載している。またエンゲルスは，小論のIで述べたように「国民経済学批判大綱」と「イギリスの状態・トマス・カーライル『過去と現在』（Die Lage Englands. ,,Past and Present'' by Thomas Carlyle）」を掲載する。

またマルクスは，エンゲルスの来訪を受ける1845年8月までの期間に，5冊の経済学ノートと4連からなる『経済学・哲学手稿』を執筆し，そのほか，ルーゲ批判の論文「論文『プロイセン国王と社会改革―― 一プロイセン人』にたいする批判的論評」（Kritische Randglossen zu dem Artikel ,,Der König von Preussen und die Sozialreform. Von einem Preussen''）を発表しているが，要するに「ルーゲやフォイエルバッハやバクーニンととりかわした手紙（Briefwechsel）（1843年3～9月）や論文『ユダヤ人問題によせて』（1843年9～10月執筆）のなかでは，マルクスはまだ，プロレタリアートの世界史的使命（die welthistorischen Mission des Proletariarts）を認識しておらず」[27]それどころか，1843年10月下旬，マルクスがパリに移住してきた時，マルクスは未だ「共産主義への途上」（auf dem Wege zum Kommunismus）にあったわけで，共産主義について確固たる認識すらなかった。なるほど，『ヘーゲル法哲学批判・序説』では，プロレタリアートの世界史的使命を論じているが，じつはこれはフォイエルバッハの借用だといわれる。つまり『ユダヤ人問題によせて』（1843年秋）とか『ヘーゲル法哲学批判・序説』（1844年初め）のような論文は「フォイエルバッハ的問題意識の文脈において，はじめて理解できるものである。たしかにマルクスの考察の主題は，フォイエルバ

ッハの直接的な関心事を越えている。しかし理論上の図式と問題意識は同じものである……〈哲学の現世化〉〈主語と述語の顚倒〉〈人間にとっての根本は，人間そのものである〉〈政治国家は類的生活である〉〈哲学の止場と実現〉〈哲学は人間解放の頭脳であり，プロレタリアートはその心臓である〉等々という有名な定式は，直接フォイエルバッハから示唆された定式であり，マルクスの観念論的〈人間主義〉のあらゆる定式は，フォイエルバッハの定式に属している。そして，たしかにマルクスはフォイエルバッハを引用し，それを再論するか，くりかえしただけ」[28]なのである。つまりマルクスはただフォイエルバッハを引用して，それを再論したり，繰返しているだけで，マルクスの創意はなかったようである。この時期のマルクスは，ある種の感傷的人間主義（gefühlmässige Humanismus）つまり「フォイエルバッハの人間学的原理にとらわれた哲学的限界のなかに」[29]留っていたにすぎず，「まだ，生産過程のなかにプロレタリアートが位置している事実こそ，その解放能力の根拠だという点を把握していない」[30]のだ。

マルクスが経済学の研究に入ったのは，1844年正月以降である。その理由は，1844年正月のことであるが「エンゲルスから《独仏年誌》のための原稿〈国民経済学批判大綱〉が編集者たるマルクスにとどけられた。イギリス古典経済学の〈市民社会〉観にするどい批判をくわえたエンゲルスの新鮮な問題意識は……経済学を知らなかったマルクスはヘーゲルの市民社会概念がステュアートやスミスのそれを原型としていたことに着目しえなかった」[31]し，自分より2つも年下の「エンゲルスがイギリス経済の理論と実際の研究によって，どれだけ先を行っていたかを知」[32]らされることになる。このエンゲルスの論文に触発されたマルクスは，ただちに経済学の研究に没頭する。だからアルチュセールはエンゲルスの天才的論文「国民経済学批判大綱」を評して，「この論文はマルクスに非常に深い影響をあたえた。この論文の重要性は過少評価されている」[33]といい切っている。

このエンゲルスの論文を読むことによって，マルクスはいまや経済学にひき入れられ，彼の研究の中心点は，資本主義の経済的諸関係の分析に移っていく。つまり「マルクスに経済学研究のきっかけ（Anstoss）をつくってやり，共産主義にとっては，この科学こそが，なににもまして重要だという点を，《天才的小論》のなかではやくも理解した功績をになっているのは，エンゲルスの方なのだ」[34]し，「マルクスより2才若かったにもかかわらず，最初の公然たる共産主義者を自任し，私的所有を排除するためには，根元的な革命（radikale Revolution）が必要かつ不可欠だ，と考えていたのも，またエンゲルスの方であった。」[35]のである。これでわかるように，マルクスはエンゲルスの「国民経済学批判大綱」と「イギリスの状態」を読んで強烈な衝撃を受ける。ことに前者は「リカードの理論とアダム・スミスの理論とへの序論であり，ブルジョア経済学の諸矛盾をその源泉である私有財産から解明しようと試みたもの」[36]だけに，マルクスはブルジョア経済学へ沈潜する必要に迫られることになる。だからまず「ペティ（Petty）とボワギュベール（Boisguillebert）からケネー（Quesnay）とスミス（Smith）を経てリカード（Ricardo）まで」[37]を並はずれた激しさで勉強し，しばしば3，4晩も続けて眠らぬこともあった程，ファウストまがいの貪欲さ（eine faustische Unersättlichkeit）で勉強し，莫大な量の読書を続けていく。しかし，この僅かな沈潜の月日のあいだでは，「いずれも論文として最終的にまとまった形をとるにはいたらなかった」[38]ようである。

マルクスはまた『独仏年誌』に掲載されたエンゲルスのもう一つの論文『イギリスの状態，トマス・カーライルの過去と現在』からも衝撃をうける。というのはエンゲルスが「すべての人間関係が，〈現金関係〉（the cash-nexus）に還元される事実のカーライルによる峻烈な告発」[39]をおこなっていることに衝撃を痛感させられる。つまり，エンゲルスは明確に「経済問題の唯一の解決が，人間を社会意識を欠いた原子論的にばらばらな個

人としてではなく，意識的に真の人間として生産するようにさせること[40]だ」と，この論文のなかで流暢で明快に書き示してみせたからである。いいかえると「この時期にマルクスに経済の重要さを教え，決定的な戦いがおこなわれるのはどの戦場であるかを示したのは，エンゲルスであり，こうしてかれはマルクスが産業界の生きた諸現実を知るのを援助した[41]」のだ，といっていい。

マルクスの『パリ手稿』の最初の論文は「かれの研究が〔エンゲルスの示唆をうけて〕経済の分野に転換したすぐあとに続いており[42]」『手稿』では「経済体制の正常な運行が必然的に非人間的な機構を生み出すこと，それが人間によって創り出されたものでありながら，やがて人間の主人公になったこと，これを示すのがマルクスの意図であった。……かれの関心は，抽象的な概念体系内の一過程としての疎外ではなく，（注。疎外一般を論じているのではない。——筆者）資本主義下の経済生活の現実的で具体的な諸条件[43]」を描写しているのだから，『手稿』は「円熟した経済学的著作の態をなしているとはいえない」もので，彼は「まだ古典派の経済理論，とりわけリカード理論のなかにある合理的なものを把握していない[44]」ことは確かであるし，「明らかにマルクスは労働価値説を拒否している[45]」し，労働価値説を，「経済学が，抽象的な法則だけを重視するあまり，結果として私的所有制の内に含まれている搾取関係を隠蔽している[46]」のだと考えて「労働の価値と価格は，まだ相互に分離されたままである。つまり前者が《抽象的》で，後者だけが《具体的》だ[47]」と述べている状態に留っており，マルクスが決定的に労働価値説をうけいれた時期は「1845年7月よりあと，1846年春に《ドイツ・イデオロギー》をかきあげる以前，このあいだのことだった[48]」と考えられる。フランスの偉大な社会主義者に対する理解にしても，『パリ時代』のマルクスは「イギリスやフランスの古典的な社会主義者たちについて——読まなかったのか，読んでも忘れてしまったのか，——いずれにせよ極めて知識に乏しかったという心証を抱

かざるをえない[49]」というような極めて心細い状態にあった。また，「マルクスがリカードの最良のプロレタリア的門弟，ホジスキン（Hodgskin）とレィヴンストン（Revestone）の2人を，この時期によんだという証拠はない。だが『イギリスにおける労働者階級の状態』を書くために，イギリスにおける労働争議を細部にわたってすでに研究していたエンゲルスは，少くともこれらの著述家たちがどのような効果を，労働者階級やブルジョア階級にもたらしたかをよく知っていた[50]」のである。

ここでもエンゲルスの方がマルクスに一歩先んじていることがわかる。だからルイスは「マルクスはフランスの偉大な社会主義者サン＝シモンおよびフーリエの理論の圧倒的な重要さがわかりかけたとき，エンゲルスの先例（Engels'footprints）にならいつつあった自分を認めている[51]」と述べているが，マルクスがエンゲルスの足跡（footprints）を follow しているということは，この時点までは，エンゲルスが〈第一ヴァイオリン〉を弾いていたということに他ならない。

(4)　1845年2月3日，マルクスはブリュッセルに着く。夫人と娘も間もなく到着。ここから『ブリュッセル時代』となる。1845年2月24日頃，フランクフルトのリッテン書店から『神聖家族』が公刊される。またエンゲルスは大著『イギリスにおける労働者階級の状態』の執筆を終了し，原稿を3月15日にライプツイヒの出版社に送っている。（5月末出版された）。エンゲルスがバルメンからブリュッセルに（マルクスの後を追うように）移住してきたのは，4月上旬のことである。その後，7月12日頃から8月21日頃まで，マルクスとエンゲルスはイギリスへ旅行をした。このイギリス旅行がマルクスの思想的開眼に対して果した役割については，小論のIで，すでに述べたとおりである。1845年9月から『ドイツ・イデオロギー』の執筆が始められ，執筆は1846年5月上旬まで継続された。『ドイツ・イデオロギー』が，マルクス，エンゲルスとモーゼス・ヘスとワイデマイヤーの4人の共同討議の所産であることは確かであ

るが，唯物史観誕生の書といわれる『ドイツ・イデオロギー』における唯物史観誕生の章ともいうべき第1巻第1章の「フォイエルバッハ，唯物論的見方と観念論的見方の対立」 1. Feuerbach. Gegensatz von materialistischer und idealistischer Anschauung (Einleitung) はエンゲルスのイニシアティブでエンゲルスの筆蹟で書かれたものであることは既に述べたとおりである。すなわち，少くとも，この時点までにおいて〈第1ヴァイオリン〉を弾いていた人物はエンゲルスであったということができる。

注 1) K.Korsch, Karl Marx, op.cit., S.145. コルシュ『マルクス』邦訳，前掲，224頁。

2) Wilhelm Liebknecht, Karl Marx, The Journeyman Press, London, 1975. p.46.

3) W.Blumenberg,op.cit., S.69. ブルーメンベルグ，邦訳，前掲，85頁。

4) M.E.W. Bd.30. S.418.『マル・エン全集』第30巻，330頁，。印引用者。

5) E.Mandel, op.cit., S.7. マンデル『カール・マルクス』邦訳，前掲，9頁。。印引用者。

6) 広松渉『青年マルクス論』平凡社，昭和46年，55～56頁。

7) 同書55頁。

8) 同書56頁。。印引用者。

9) 同書18～19頁。。印引用者。

10) Blumenberg, op. cit ., S.148. ブルーメンベルク，邦訳，前掲，180頁。

11) メーリング『マルクス伝』(I)，前掲，42頁。

12) D.McLellan, Karl Marx, op.cit., p.12. マクラレン『マルクス伝』邦訳，前掲，9頁，。印引用者。

13) M.E.W. Bd. 40. S.9.『マル・エン全集』第40巻9頁,。印引用者。

14) Blumenberg, op. cit., S.39. ブルーメンベルク，邦訳，前掲，49頁。

15) ibid., S.42. 同書 53頁。

16) ibid., S.54. 同書 66頁。

17) Mandel, op. cit., S.7. マンデル『カール・マルクス』邦訳，前掲9頁，。印引用者。

18) ibid., S.9. 同書11頁。

19） Lukács, op. cit., S.18. ルカーチ『若きマルクス』邦訳，前掲，36頁。
20） M.E.W. Bd. 1. op.cit., S.108. 『全集』第1巻，124～5頁，傍点原著者，。印引用者。
21） Lewis, op.cit., p.34. 邦訳，前掲，41頁。
22） Lukács, op.cit., S.20. 邦訳，前掲，41頁，。印引用者。
23） ibid., S.20. 同書41頁，。印引用者。
24） ibid., S.29. 同書66～67頁，。印引用者。
25） Blumenberg, op.cit., S.52. 邦訳，前掲，63頁。
26） Lewis, op.cit., p.42. ルイス，邦訳，前掲，53頁。
27） Lukács, Der junge Marx, op.cit., S.41. ルカーチ『若きマルクス』邦訳，前掲，99頁。
28） ルイ・アルチュセール『甦るマルクス』河野健二ほか訳，1968年，人文書院，60～61頁，。印引用者。
29） Mandel, op.cit., S.13. マンデル，邦訳，前掲，14頁。
30） ibid., S.12. 同書 14頁。
31） 望月清司「ドイツ・イデオロギー」(『マルクス・コメンタール』（Ⅲ）現代の理論社，昭和52年，33頁所収)，。印引用者。
32） Blumenberg, op.cit., S.64. 邦訳，前掲，80頁，。印引用者。
33） アルチュセール，前掲，121頁，。印引用者。
34） Mandel, op.cit., S.6. 邦訳，前掲，8頁，。印引用者。
35） ibid., S.6. 同書8頁，。印引用者。
36） Lewis, op.cit., pp.47～48. 邦訳，前掲，61～62頁。
37） K.Korsch, Karl Marx, op.cit., S.5. コルシュ，邦訳，前掲，15頁。
38） Lukács, SS.53～54. 邦訳，前掲，131頁。
39） Lewis, op.cit., p.54. 邦訳，前掲，70頁。
40） ibid., p.48. 同書62頁。
41） ibid., p.48. 同書63頁，。印引用者。
42） ibid., p.54. 同書70頁。
43） ibid., p.54. 同書71頁。
44） Mandel, op.cit., S.31. 邦訳，前掲，41頁。
45） ibid., S.36. 同書52頁，。印引用者。
46） ibid., S.38. 同書54頁，傍点原著者，。印引用者。
47） ibid., S.40. 同書57頁。
48） ibid., S.42. 同書60頁，。印引用者。
49） 広松渉『青年マルクス論』前掲，248頁，。印引用者。

50） Mandel, op.cit., S.41. マンデル，邦訳，前掲，58頁，。印引用者。
51） Lewis, op.cit., p.44. 邦訳，前掲，57頁，。印引用者。

む　す　び

以上で明らかなように，筆者は小論Ⅰにおいて，若きエンゲルスの人間像と旺盛な著作活動を述べ，Ⅱでは，若きマルクスのそれを述べて比較検討してみた。すでに明らかなように，少くとも『ドイツ・イデオロギー』までの時期において，マルクスをいつもリードし，マルクスに実り豊かな示唆を与え，かつマルクスをして，「経済学の宝庫」に向わしめたのはエンゲルスであった。マルクスをしてロバート・オーエンの著作に親しませ，またイギリス労働者階級の政治的・経済的闘争の実態を知らしめたのもエンゲルスであった。2人のイギリス旅行においても，産業界の生きた現実を知らしむべくマルクスを援助したのもエンゲルスだったし，マルクスをイギリス社会主義運動家たちに，友人として紹介することによって，マルクスの思想発展に努力したのもエンゲルスであった。

『ドイツ・イデオロギー』が唯物史観の誕生の書であることは，こんにち識者間の常識であるが，――唯物史観が科学的社会主義の基礎概念であるとすれば，科学的社会主義成立にあたって，〈第1ヴァイオリン〉を弾いたものは，――小論で明らかにされたように，決してマルクスではなかった。エンゲルスこそ，唯物史観の命名の親であり，また〈第1ヴァイオリン〉を弾いていた人物であったと断定しうる。小論は資料に即して，両者の歩みを比較検討しつつ，これまでの，ややもすればエンゲルスに対する過少評価を戒めるとともに，マルクス第1ヴァイオリン説の誤りに対する，ささやかな反論をおこなったつもりである。